

## 天空の茶畑で、 人なつっこい 自閉症青年に会った

「岐阜のマチュピチュ」と呼ばれる山里の茶畑では、三年番茶の収穫作業の追い込み時期だった。雪にも、雨にも、急峻な坂にもめげず、障害者はお茶を刈り、枝を運ぶ。体が冷えたら、三年番茶を飲んで温めればいい。



### 冬に刈り取る三年番茶

天空の茶畑は一面の雪だった。しとしと雨も降っている。こんな日に、三年番茶の刈り取りができるのか。

ふもとの公園でみんなトイレを使ったとき、温度計は四度だった。「これじゃ、茶畑も雨だよ」と、いぶき福祉会の農業責任者の森山めぐみさんがつぶやいた通りだった。茶畑は傾斜がきつく、バランスを崩しやすい。雨で滑り、体も芯から冷える。ふだんなら作

業を避ける。「でも、今日はガンバってやろうね。いい写真を撮ってもらおうね」と、森山さんはみんなに声をかけた後、カメラマンにツヨリ振り向いた。

盃のように向こうの山まで一面の茶畑が広がる。なだらかに見えて、かなり急峻な坂だ。煎茶畑は、きれいに刈りそろえられて、モコモコと雪帽子をかぶっている。盃の底には谷が走り、そこには一本のつり橋がかかっている。なるほど、これが、「岐阜のマチュピチュ」か。温かい三年番茶を飲んで体をほぐし

て茶畑に向かう。

煎茶畑の中からむっくり顔を出しているのが、三年番茶。寝ぐせのついたボサボサ髪のように枝が方々に伸びている。障害者が三つほどの組に分かれて、木の根元にかがみこむ。足を踏んばり、のこぎり、剪定ばさみで根に近くところを切る。三年番茶は、煎茶のように葉だけ摘むのではない。枝ごとお茶になる。葉がついたままの枝を抱え、道の上まで運ぶ。急こう配なのに、滑ってよろける人はいない。みんなゆつくりとし

かし、しっかりした足取りだ。

春日出身で煎茶づくりをしている森俊実さんも、名古屋から様子を見に駆けつけてくれた。森さんに気づいた障害者は、「としみさくん、としみさくん」と呼びかけた。「森さん、ぼくらにお茶の栽培を教えてくださいときは厳しいですけど、利用者には本当にやさしくて」と、スタッフの佐藤健太郎さんは笑った。森さんにとって、佐藤さんは子どもで、障害者は孫のようなのだらう。